

鎌倉時代の二字漢語アクセントの構造

— 妙一記念心館本仮名書き法華経による —

沼本克明

一序

本稿は『妙一記念館本仮名書き法華経』(註¹)を資料として、鎌倉時代の漢語アクセントの構造を多角的に捉えてみようとするものである。

当該文献は、法華経を訓読して漢字平仮名交り文で表記されたものであるが、その中に含まれる漢語の部分には詳細に声点と振り仮名が加えられており、その成立書写当時——鎌倉初期——中期と推定される——の漢語アクセントの有効な資料となるものである。

漢語の中でも二字漢語は、日本語の中で、古今を通じて最も基本的なものである。本稿では、その二字漢語のみを対象とした。本資料の全体の漢語アクセントについては別稿(註²)でその概観を加えたので、それに全て譲ることとする。

二 九条本法華経音の単字声調との比較

本資料は法華経の訓読資料であるから、基本的に呉音系字音

に支えられた漢語である。各漢字の単字としての呉音声調が平・上・去・入のいずれであったかは絶対的なものではないのであるが、平安時代の法華経の読誦音について言えば、一応『九条本法華経音』(及び『保延本法華経単字』)の反切を分析することによって把握することが可能である。九条本と保延本で相違するものが存するが、それは比率的に見れば極めて低く、その相違の要因は学統乃至個人の認定のゆれに係わるものであろう。ともかく、九条本の反切の示す四声は呉音系字音の初期的段階における実態を示すものと考えられるものであるから、これを比較の対象として、本資料の二字漢語に加えられている四声点を対照させて、統計的に全体を概観すると次の如くになっている。

△ 処理の方法

阿惟³——阿は九条本去声。惟は九条本去声。従って、

九条本去声が本資料上声二例対応、として処理する。以下同様な方法を取る。

ちなみに、九条本の単字声調には上声はなく、平・去・入声のみであり、呉音は本来この様な三声体系であったことが立

証されている(註3)。

計	入	去	平	本書	
				九条本	平
1476	34	93	1349	平	
791	2	734	55	上	
742	2	708	32	去	
819	572	20	227	入	
3828	610	1555	1663	計	

九条本の単字声調のままが本書に反映した場合は、当然の事ながら、右表の網懸部のみ分布するのであるが、実際には種々の要因によって、それ以外に分布している。その要因を分析することによって、本書の二字漢語アクセントの構造を把握してみようとする訳である。

右表で異例の多いものから、以下順次検討を加えることにする。

三 去声字の上声差声例

九条本去声字が本資料で上声に差声されている例が七三四例

存する。呉音の去声字の上声化については、既に明らかにされている所であるが、二つの歴史的現象が存在した。一つは、①去声一音節字の上声化、一つは②語アクセント化に伴う語中低拍の回避による上声化である。本資料の七三四例の上声例も、基本的にこの現象に係わるものである。

① 去声一音節字の上声化

本資料の去声一音節字は殆ど全て上声の声点を加えられている。若干例を掲げてみる。

- 阿(九条本去声) — 阿惟 905
- 姨(去声) — 姨母 760
- 違(平去両声字) — 違背 1060
- 威(去声) — 威神 1326、威德 304・312・344・891
- 鬼(去声) — 惡鬼 244・252・1226
- 置(去声) — 安置 218
- 時(去声) — 一時 1234
- 疽(去声) — 癰疽 283
- 求(去声) — 依求 233

語頭の場合について見ると、一音節字で去声を保った例は、全巻を通じて

- 功徳 179・1308、終没 301、終始 164、離別 300、團遠 338、充満 261

の六例のみである。この中、功・終・充は、「クウ」「ジュウ」「ジュウ」と二音節相当として認識されたものである可能性があるから、語頭での例外は殆ど無いということになる。

語中の場合も、上接字の声調がいかなる場合でも上声点之差

されるのが原則であつて、例外は、全巻を通じて

魁膾⁷⁹¹、蝮⁷⁹¹、蝮²⁴³、受持²⁸⁹、信受¹⁷⁴、命終²⁷⁵・¹¹⁴⁵、羸³⁴⁰

の七例のみである。右の例外の中、「受」は九条本平声字であり、本資料でも他例は平声（乃至入声）が差されており、孤例である。又「蝮」「終」は二音節相当と認識された可能性もあり、語中の例も、例外は殆ど無いのである。

扱、以上の如く、本資料においても、呉音本来の去声一音節字は上声化を完了していることが明らかなのであつて、本資料の呉音単字声調の体系は、

(平安・九条本) (本書)

平声 ↓ 平声

去声一音節 ↓ 上声

二音節 ↓ 去声

入声 ↓ 入声

のように、平上去入の四声体系に移行していたことが確認できる。

● 語アクセント化に伴う去声の上声化

次に、平安後期以後の呉音では、語中の去声字が、上接字に去声又は上声が来る時、上声化する事象が発生した。この変化は、語中に出現することになるアクセントの谷「高低高」を「高高低」に回避するものであつて、字音直読の場合でも、漢語の場合でも、徹底して生じた現象である。

この現象について、本資料の実態を調査してみると、殆ど例外なく上声化している。若干の例を示してみる。

○ 上去↓上上の例

阿惟⁹⁰⁵、威神¹³²⁶、河海¹⁰¹⁴、海中⁷⁴⁴、几案²¹¹
○ 去去↓去上の例

因縁²⁰⁶、音聲¹⁸⁰、速塵¹³¹²、慳慳²³⁰、香水³⁰³

但し、この場合にも、僅かではあるが次の様な例外がある。

○ 上去型を保つもの

河海¹⁰¹⁴（但し上声点と併存、海は九条本平声字）、除糞³⁴⁶、如来¹⁷³、豺膾⁷⁹¹

○ 去去型を保つもの

幼童²¹¹・³³⁶、梅壇³⁶³、禪定²³⁸、寶鈴¹¹⁵³、名聞¹⁷⁹

なぜ上声化していないのかの理由については明確ではないが或いは一語化していないと認識されたものということも考えられよう。

ともかく例外は僅少であつて、本資料でも語アクセント化に伴う去声字の上声化が完了していたとした場合、更に

所で、①②の事象が本資料で完了していたとした場合、更に

次の様な例外が残る。

○ 語頭二音節上声の例

空閑⁷⁷¹・⁹⁹¹、空中⁸⁹¹、空篋⁹⁷¹、玩好²¹⁷、閑居²⁶²、言趣⁹⁶、瘡癬³⁴⁰、宗重³³⁸、水沫¹⁰⁰⁶、抄劫²⁸⁰、通利¹³²⁰、天子²⁰²、表利¹¹⁵³、盈溢³⁰¹・³²¹、瓔珞³⁰³

去声二音節字は原則として去声を保っているのであるが、これ等は上声点が加添されているものである。

○ 平・入声の後の二音節上声の例

象聲1017、樂聲1018、喜聲1018、苦聲1018、鼓聲1018、語
 聲1018、車聲198、法聲1018、馬聲1018、化生991、駘中822
 黑山1161、土中1161、曲躬293、念言322・1138・1140・1153
 食嗽244、濕生991、守宮243、森盜280、第二269、一人1234
 女形1018・1277、儂從260、寶來265、寶臺1137・1300、抹香
 1281

上声・去声の後では去声は上声化するが、平声・入声の後では本来の去声を保つていて良いはずであるが、右の諸例は上声点が差された例である。

これ等のいわば例外と見なされるものが何故出現するのか問題となるが、これ等の一つ一つの漢語が全て同一の理由によつて出現したとは言えないようである。

扱、ともかく、以上の様に、九条本去声字が本書で上声点の差されている七三四例は、平安時代から鎌倉時代にかけて呉音の上に発生した、①去声一音節字の上声化、②上声又は去声に下接した去声の上声化、という二つの音韻変化によつて出現したものであることが明らかになる。

四 平声・去声字の入声差声例

九条本の平声字に入声点の差されたものが二二七例、九条本の去声字に入声点の差されたものが二十例出現する。

(a) 平声字に入声点の差された例
 懊惱1152、悪獸249、女住184・186、闇鈍278、引導187、憂患

224、憂惱1177・925・1155、幽冥1123、蜿轉278、應供190、億想913、好樂225、巷陌989、江河1161、告勅768、豪富339、覺道233、渴仰933、喜樂295、傾動960、驚疑183、凶險247、孔穴249、供養189、究竟1077、苦惱921・1167、垢重909、恭敬182・916、軀命222、具足263、曠野1115、歡喜171・217、願樂358、外道290、蠲除328、還富1157・1157、群狗243、下劣310、懈倦225、教化186・187、教化191・907・910・1156、教門237、樂說941、樂着110・214・253・328、險道237、險宅256、居士1239、庫藏219・258、賈客299、賈人338、虛妄239・1084、五衆202、五欲337、互相216、欺誑179、國土294、欣慶199、欣樂355、勤修235、嚴好1002、澡浴800、象聲1017、雜寶218、二界227・238、示教1128、示教1322、自在260、侍立303、七寶1160、實道185、擔掣244、正法189、將導1095、唱導843、清淨186・190、精進234・234、精進235、悼惶243、醒悟309、上昇1147(上のみ、昇は去声)、成就242、衆生234、種種183、充遍242、淳厚1157、稱讚180、稱歎233・239、勝幡954、信受234・235、親厚785、震動1106・1158、盡滅182、哀惱224、哀老924、舌相1106・1117、踐踏243、産生244、瞻仰171、瞻仰760・847・1102、鹿弊231、窓牖247、窓牖314、走使727、息利338、尊重1090、大衆179・182・187、討罰818、擣徒921、道場181・978、道利990、馳走227、籌量180、猪狗282、珠寶221・350・1111、鴨鷺242・249・252、顛倒787、顛倒923(倒のみ、顛は去声)、轉教990、等1217、闕諱244・245、得道185、頓弊241、乃往1282、惱乱183、柔粟186、熱病1277、背喪925、方便184・187、放逸806、泡指1006、秘要1113、畢竟1122、平

正¹⁹⁰、病死²²⁵、白象¹³²²、不淨³¹⁴、蓬煖²⁵⁰、佛口¹⁷⁵、
 佛教¹⁷⁷、佛子¹⁷⁸、佛道¹⁸⁸、法藏²³⁸、法性¹⁷³、寶繩²¹⁶、
 寶華¹¹⁵⁸、寶衣¹¹⁴¹、寶藏¹⁰³⁵、寶樹¹¹⁰⁵、1136・1136、寶帳
 1111・1136、寶瓶¹¹³⁶・1152、寶物²²⁹・258、梵志⁸¹、梵王¹²
 37、蔓蓮²⁵²、微妙¹⁸⁶・909、愍念²³⁶・1285、無量⁹⁴¹、無上¹
 86、無量¹⁸⁴・237・240、妙好¹⁷⁸、減度¹⁸⁴、免濟²³⁰、蚰蜒²⁴
 3、蚰蜒²⁵⁰、誘喻²¹²、容顏¹¹⁴⁸、欄楯²¹⁸、聾駘²⁷⁸、漏盡¹
 77、往返²⁴⁵、往詣¹²⁸⁶、圍遶²⁵⁹・341・1329

以上の、九条本平声字に入声点の差された例には明瞭な傾向性が有る。

一つは、「一ウ」韻尾（中国原音ではuとü）を有するもので、二二七例中一六五例がこれに該当する。これらは唇内入声字「一フ」がハ行転呼音の結果「一ウ」となつてしまひ、その結果として「一ウ」韻尾の平声と唇内入声との区別が不能になり、結果的に誤差声されたものと考えられる。この現象は、次述の入声字に平声点の差された例と表裏の現象である。

もう一つは、「一ン」韻尾の場合で、二二七例中、三六例がこれに該当する。この現象は、本書の加点者の音韻体系において、促音と撥音が未分化であつたことを反映するものと解釈される。ちなみに、本書ではmとnとは統合してしまつてい

残るのは、

豪富、還富、具足、歡喜（二例）、外道、下劣、居士、賈人、
 賈客、五欲、國土、三界（二例）、自在、侍立、搥掣、醒悟、
 麤弊、息利、猪狗、佛口、佛子、無羂、減度。

の二五例である。前後に入声点と共起しているものはその影響による誤点の可能性が考えられよう。「富」の二例は「フク」の音との誤認の可能性、「猪狗」の場合は「チヨク」という喉内入声への誤認が考えられる。入声差声の明確な理由が説明できないものも残るが、いずれも入声と平声とが低平調という調値で共通していた所から来る誤点と言える。

(b) 去声字に入声点の差された例

嗥吠²²⁴、苦痛²⁷⁷、火宅²²⁰、歡娛²⁵¹、絞絡²⁵⁹、困苦²²⁷、
 瘡疹¹⁰⁰¹、莊校²¹⁸、上昇¹¹⁴⁷（上は平声字）、周章²⁵¹、所
 行¹⁸⁹、憔悴³²²、蹻蹻²⁴⁵、丹枕²¹⁸、断絶³³⁰、顛倒⁹²³（
 倒は平声字）、奉行¹¹²⁵・1130、偏黨²²⁰、迷惑²⁷²、門外²⁵¹、
 以上二二例である。ここでも韻尾「一ウ」の字が十例、「一
 ン」のものが六例を占めている。その他は僅か六例であつて、
 これ等の中には、上下に入声点と共起するなどの為の單純な誤
 差声であろう。

扱、平・去声が入声に差された例は、以上の様に、まずハ行
 転呼音による唇内入声韻尾の母音化が背景にあることが指摘出
 来る。調値から言えば、入声と平声とは全く同じ低平調であり、
 入声点と平声点の差し分けは、ただ、「一フ・ク・ツ・チ・キ
 」の仮名で終わるものに入声点を差す必要があるが、この中の
 「一フ」は、この種の文献の読誦者においては「一ウ」化して
 しまつていた——従つて、唇内入声字の区別が不可能になつて
 いた——ということである。この当時のこの種の和文系資料の
 位相における実態が良く反映している訳である。

舌内撥音韻尾字に入声点が多く差されているのも、この種の位相においては促音と撥音の音韻としての未分化を反映していた可能性が有るが、この点については別に論じてみる必要があるであろう。

五 入声字の平声・上声・去声差声例

丁度右の四の場合とは逆の関係にあるものが、本項の場合であって、次の諸例である。

(a) 入声字に平声点の差された例

- 給與^{258・991}、経歴³⁴⁰、胸臆⁷⁸⁶、鳩鴿²⁴²、眷属¹⁰⁵²、狹劣¹⁷⁹、344、國邑²⁰⁸、細數²⁵⁹、賊富^{208・219・237}、雜械²⁴²、二匣¹²⁹⁹、侍立³⁰³、七匣¹³¹⁷、執持³¹⁵、修習^{853・1124・1125・1302}、出入^{299・338}、抄劫²⁸⁰、撰集¹⁰²⁴、善國⁷⁶⁴、道法¹³⁰²、塔廟⁹⁸⁴、住立³⁰²、惱急²⁵³、蝮蝎¹²⁵³、法輪²⁰¹、来入²⁷⁷、累劫²⁶⁶

全三四例中、唇内入声字が二六例、喉内入声字が八例で、舌内入声字は一例も無い。唇内入声字は、殆どの振仮名が「一ウ」となっており、ハ行転呼音の結果、「一ウ・一リ」韻尾の平声「一ウ」韻尾と区別が出来なかつた為の出現である。喉内入声字も「りやく」「やく」等開音節化して二音節となり平声と区別できなくなつた為の出現例と言える。舌内入声字はこの種の文献の場合も「一ツ」「一チ」が入声の典型として意識されて知識的な区別が明確であつたことを物語る。但し、「一t」とい

う入声形を保つていた為であつたかどうかは明確にしがたい。

(b) 入声字に上声・去声点の差された例

- 賈客¹⁶⁹、生育⁸⁸²、所欲²¹⁵、相撲⁷⁵²

上声点の差された「客」「育」は字音直読資料では入声軽であつたと考えられる。入声軽の調値は高平調であり上声と同じである。従つて、この二例の上声は、調値のままに上声点加點された例と解されることになる。去声点の加えられている「欲」には入声点も同時に差されており、誤点を訂正してあるものとも見られる。「撲」については單純な誤点と見ることもできる。いずれにしても僅か二例のみの例外である。これ等の中に、やはり舌内入声字の例が見られないことは重要な点である。

(a)(b)を通じて、舌内入声字「一ツ」「一チ」は入声としての位置づけが明確であつたが、唇内入声字及び喉内入声字の場合は、入声の位置づけが曖昧になり、調値のままに低平調ならば平声点、高平調ならば上声点差される例が本書では出現している。本資料の如き位相語 || 口頭語・和文語 || においては韻学的知識によつてのみ支えられる唇内・喉内入声字の区別がかなり弛緩していたという実態が明らかになるのである。

六 平声字の上声・去声差声例

(a) 平声字に上声点の差された例

- 癩疽²⁸³、瘡痍¹⁰⁰⁰、河海¹⁰¹⁴、嬉戲^{253・254・792・1031}、禽獸²⁸³、凶險⁷⁹²、苦海⁹³³、玩好²¹⁷、雜狗¹³³⁴、捷駄¹²⁷⁷

○→○○● (二例)、○_{露地}→○○

△計▽
○○○→○○● 8例
○○○→○○● 1例
○○○→○○● 4例

○○○→○○○ 10例
○○○→○○○ 7例
○○○→○○○ 7例
○○○→○○○ 1例
○○○→○○○ 1例
○○○→○○○ 2例

○○○→○○○ 1例
○○○→○○○ 1例
○○○→○○○ 1例

(b)の例
強揚 ○○○→○○○
散化 ○○○→○○○
衰弱 ○○○→○○○
著加 ○○○→○○○
尖 ○○○→○○○
利鈍 ○○○→○○○

志難 ○○○→○○○
相統 ○○○→○○○
性 ○○○→○○○
本極 ○○○→○○○
戲論 ○○○→○○○
敬 ○○○→○○○

△計▽
○○○→○○○ 3例
○○○→○○○ 2例
○○○→○○○ 6例
○○○→○○○ 5例

右に見る様に片寄った出現をしていると見えそうであり、これ等は上段の型から下段の型への語アクセント化による例と見

ることが出来そうである。但し、下段の型の方が当時の語アクセントとして安定的な優勢な型であつて、そのために変化したものであるかどうかは後に検討する。

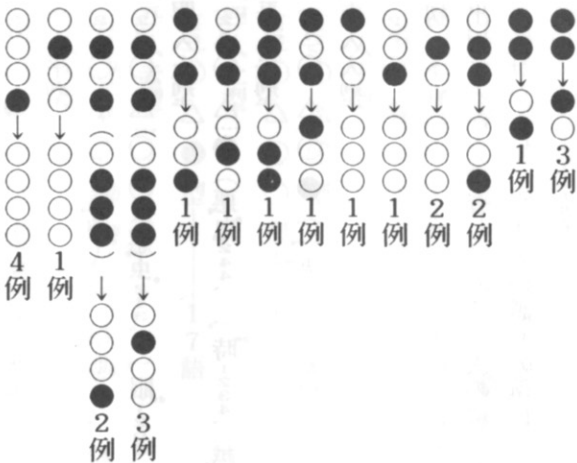
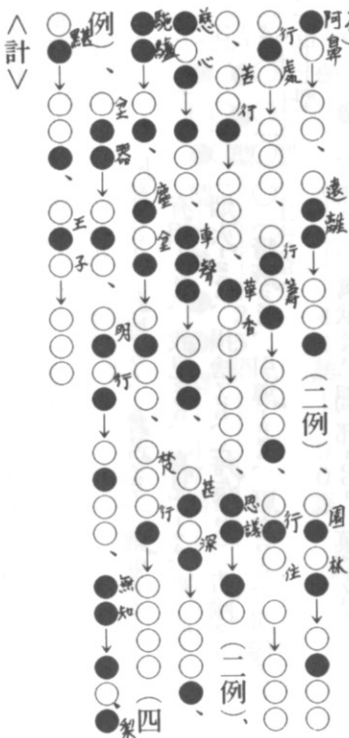
七 去声字の平声差声例

阿鼻 1016・1092、哀邁 208、憂慮 317、烟火 1253、遠離 757・776
園林 959、怨嫌 798、餓鬼 274・737・1276、餓鬼 250、九方 946、
行處 282、行籌 861、行住 1289、苦行 1138、垢膩 315、弘誓 1248、
窮困 298、火坑 1249・1249、火宅 215 (火は保延本平声)、
果報 1014 (果は保延本平声)、嗚邪 1001 (嗚は保延本平声)、
過去 184・725・1134 (過は保延本平声)、過世 204、墓塚 731 (菓は保延本声点平声)、寡女 785、瓦石 276 (保延本声点平声)、
臥具 958、875、華香 1143、五衆 202、五欲 273、坐臥 986、
1286、姪陋 278、姪陋 344、灾火 252 (火は保延本平声)、三反 1130、
思議 181・858、慈心 286、車聲 1018、車渠 258、周流 337、
周遍 1136、周章 249、姝好 260、諸君 324、臣佐 299、甚深 1113、
憔悴 314、多年 1084、駝驢 282、大火 1223 (火は保延本平声)、
大果 361 (果は保延本平声)、丹枕 218、地酒 254、長者 209・209・216・217・1239・1241、塵 314、顛倒 787、顛倒 930、
仁者 1244、悲哀 1155、孚乳 244、梵行 193・361・881・883、器 316、
米麵 316、明行 1079、無知 251、良醫 918・927、牢固 1006、
吏民 299・303、梨羅 275、戀慕 917・931・933・1152、汚穢 314、和雅 746、
王子 197、憤戾 875

以上の九七例中、九条本と本資料とで単字の四声が異なつて

おり、本資料で本来平声字であった可能性の高いものを取り上げると、「哀邁」「悲哀」の「哀」、「餓鬼」の「餓」、保延本で平声字であり本資料でも平声点のみの「火」「果」「菓」「喝」「過」「瓦」「臥」、「五衆」「五欲」の「五」、長者「仁者」の「者」、「顛倒」の「顛」、「戀慕」の「慕」、である。その他の中「慮」「烟」「嫌」「九」「膩」「誓」「困」「寔」「漬」「姓」「痊」「反」「渠」「章」「姝」「君」「更」「汙」「雅」は本資料中では一例のみであって、判別ができていくものである。

右の諸例を除いたものは、他に本資料中に去声差声例が有り、単字声調は九条本と同じく去声であったものと一応判定することが出来るから、これ等は語アクセント化による変化に係わる例と見ることが可能である。そこで、その変化を先と同様に示してみると次の様になる。(一音節去声字は上声化したものとする)。



去声から平声への場合には、右の様に際立った傾向を見出すことができない。恣意的な揺れの現象にすぎないと見るべきであろうか。

扱、語アクセント化がなぜ起こるかを考えた場合、その原因として、優勢な型への統合ということが考えられる。そこでの点について——鎌倉時代の漢語アクセントの型の構造がいかなるものであったか——最後に検討しておくことにする。

八 本資料における二字漢語アクセントの型

既述した様に、本資料はその時代性を反映して、去声一音節

字は上声化していた、「上去」と並ぶ場合の下接去声は上声化していた、から、本資料の二字漢語のアクセント型の可能性としては原則的に次の二五型ということになる。

(一) 平平型 (若干の実例を示す)

- (1) ○○○ (阿鼻¹⁰⁹²、有智²⁰⁷、會苦²²⁷、餓鬼²⁴⁷)
- (2) ○○○ (有相¹²³²、我見²⁰⁵、喜見¹¹⁴⁴、毀謗²⁷³)
- (3) ○○○ (烟火¹²⁵³、損捨⁷²⁶、痔瘻⁸²、告諭²⁵²)
- (4) ○○○ (暗蔽²²⁵、引導¹²⁸⁵、厭怠⁹¹⁵、演暢⁷⁶⁶)

(二) 平上型

- (5) ○○○ (有無²⁰⁵、禽獸²⁸³、嗚邪¹⁰⁰¹、莫⁷³⁴)
- (6) ○○○ (安置²¹⁸、塩酢³¹⁶、遠離⁷⁵⁷、勤加³²⁸)

(三) 平去型

- (7) ○○○ (異心²⁸⁶、惠光⁹³⁷、我慢⁷⁷¹、九方⁹⁴⁶)
- (8) ○○○ (哀邁²⁰⁸、879、街賣⁷⁷¹、嶮隘¹⁰³⁷)

(四) 平入型

- (9) ○○○ (惠日¹²⁵⁶、穢濁¹⁰⁶²、妓樂²⁰¹、休息²⁷⁸)
- (10) ○○○ (演說¹⁷⁸、眷属³⁴¹、教勅³²²、樂說¹⁰⁸⁷)

(五) 上平型

- (11) ○○○ (姨母⁷⁶⁰、烏呼¹⁷⁸、憂悔¹¹⁵、依止²⁶⁸)
- (12) ○○○ (遠背¹⁰⁶⁰、醫道²⁷⁹、憂念³³⁷、歌頌⁹⁷²)

(六) 上上型

- (13) ○○○ (依求²³³、伽耶⁸⁸⁷、枷録²²⁶、俱持²⁰⁹)
- (14) ○○○ (消滅) ↓ 上上型 ○○○ (阿惟⁹⁰⁵、威神¹³)

26、河海¹⁰¹⁴、几案²¹¹

(八) 上入型

- (15) ○○○ (威德³⁰⁴、烏鵲²⁴²、憂色⁷⁶⁰、衣祴²¹¹)

(九) 去平型

- (16) ○○○ (安慰¹³¹⁹、擁護¹²⁶⁶、開化⁷⁹⁶、開示²⁶³)
- (17) ○○○ (安穩¹⁷⁵、圓滿⁰⁰²、音教³³⁶、園林⁹⁵⁹)

(一〇) 上去型

- (18) ○○○ (幼稚²¹¹、癩疽²⁸³、香油¹⁴²、香爐⁹⁴⁶)

(一一) 去去型

- (19) ○○○ (幼童²²⁰、但シ大部分消滅) ↓ 上去型
- (20) ○○○ (因縁²⁰⁶、音聲¹⁸⁰、遠塵¹³¹²、慇懃²³⁰)

(一二) 去入型

- (21) ○○○ (惡趣¹³²⁸、學地²⁰⁵、給侍¹¹⁵⁰、客作³¹⁹)
- (22) ○○○ (惡虫²⁴³、一眼¹²⁹⁶、憶念¹⁸⁸、渴仰⁹¹⁷)

(一三) 入上型

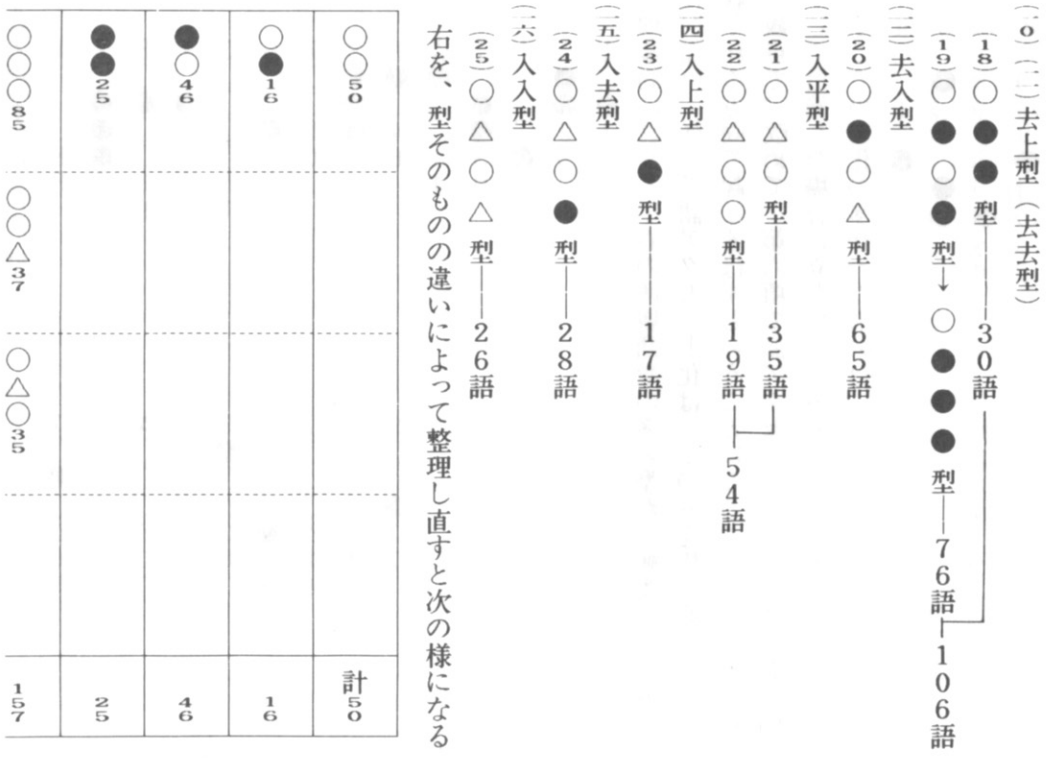
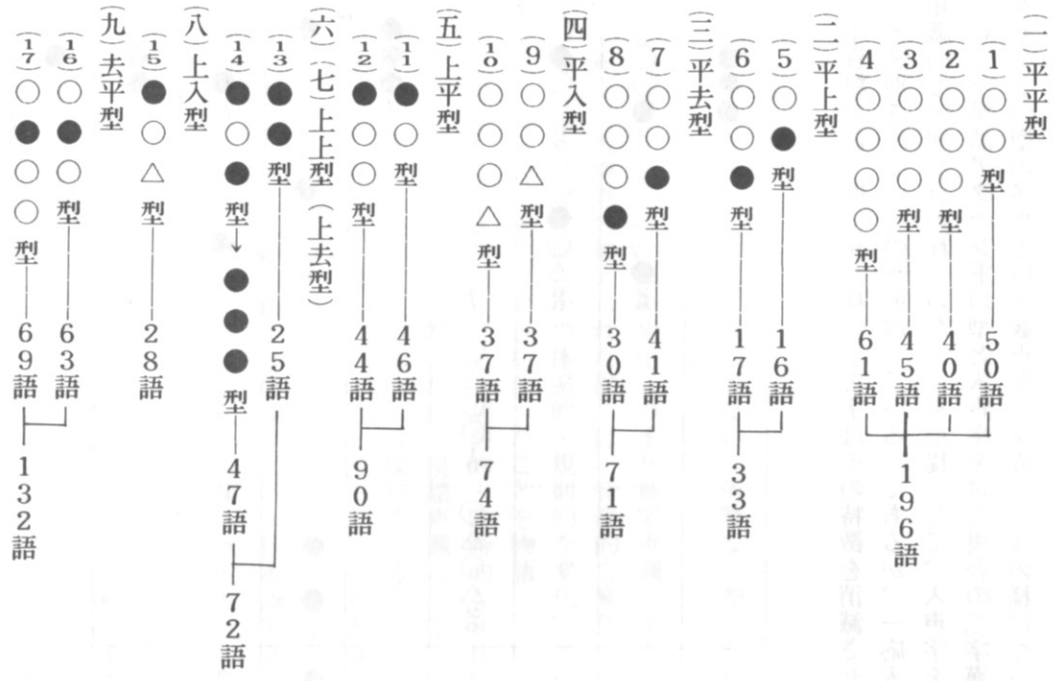
- (23) ○○○ (惡鬼²⁴⁴、一時¹²³⁴、越致⁹⁰⁵、結跏¹¹⁴⁵)

(一四) 入去型

- (24) ○○○ (一乘³³⁴、結恨²⁷⁴、国王³²⁴、曲戾¹⁰⁰²)
- (25) ○○○ (一法¹⁷⁸、屈曲²⁴²、国邑³⁰⁰、骨肉²⁴³)

(一五) 入入型

扱、本資料の二字漢語で、実際には右の型にそれぞれ何例ずつ出現するかを調査してみると次の様になっている。(但し、この統計からは、平→入の誤りの例については一応全て除外し処理することとした。)



○ ● ● ● 76	○ ○ ○ ● 36	○ ● ○ ○ ○ 69	○ ○ ○ ○ ○ 61	● ● ● 47	● ○ ○ 44	○ ○ ● 58	○ ● ● 30	○ ● ○ 63
	○ △ ○ ○ ● 28	○ ● ○ △ 65	○ ○ ○ △ 37		● ○ △ 28	○ △ ● 17		
			○ △ ○ ○ ○ 19					
			○ △ ○ ○ △ 26					
76	58	134	143	47	72	75	30	63

本資料では、既に見た様に入声字はその特徴を消滅させ平声字と区別されないものが増加しているのであるが、一応入声の知識的な区別が行われていたことを前提として、入声字を含まない二字漢語アクセントの型と入声字を含む場合の二字漢語アクセントの型の多少という観点から見直すと次の様になる。

◎入声字を含まない型

- 1 ○○○○85
 2 ○○○●76
 3 ○○○○69
 4 ○○○●63
 5 ○○○○61
 6 ○○○●58
 7 ○○○○50
 8 ●○○●47
 9 ●○○●46
 10 ●○○○44
 11 ○○○●30
 12 ○○○○30
 13 ●○○●25
 14 ●○○●16
-
- ◎入声を含む型
- 1 ○○○△65
 2 ○○○△37
 3 ○○○△37
 4 ○○○△35
 5 ●○○△28
 5 ○○○△28
 7 ○○○△26
 8 ○○○○19
 9 ○○○△17

理論的に言うと、右の所属語数の多い型から順番にその安定性が高い、従って語アクセント化は、その安定性の高い形へ吸収される方向で起こるはずということになるであろう。そういう観点で、改めて、第六項で語アクセント化の可能性の有る例として指摘した場合に立ち戻ってみることにする。

そこでの変化の多かったものは、

- a ○○○↓○●
 b ○○○↓○●
 c ○○○↓○●
 d ○○○↓○●

e ○○○○↓○●○○

であるが、これ等の変化は、所属語数の順序から言えば

a、7↓14

b、4↓11

c、1↓6

d、1↓10

e、5↓3

の如く、eを除いて全て、数の少ない(劣勢な)型へ変化したものであることが明らかになる。

この事は、結局これ等の変化(つまり単字声調が平声のものに上声又は去声点の加えられた例)は、音韻的な変化(或いは言い方を換えれば、何らかの体系的・規則的な変化)ではなく個別的・臨時的な変化にすぎなかったことを物語っていることになると思われる。但し、その個別的・臨時的な変化が見られるということ強調して扱えば、漢語声調(一字ごとの漢字の声調が熟語となっても基本的には保存されるという)の和化が鎌倉時代初中期に起こっていたと言いうこともできる。但しそれは、言うまでもなく去↓去+上(○●○○↓○○●●●●)上+去↓上+上(●○○↓●●●●)という日本語アクセント型に全く存在しない型を回避するという第一次的和化は除外してその上に更に、という意味でのことである。

注1、中田祝夫博士編『妙一記念館本仮名書き法華経影印篇』(佛乃世界社)による。

注2、中田祝夫博士編『妙一記念館本仮名書き法華経研究篇』(佛乃世界社)による。

佛乃世界社)所載(未刊)。

注3、拙著『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就きての研究』本論第一部第五章吳音の声調体系に就て、参照。

(ぬもと かつあき、広島大学教授)

(平成四年十一月二十七日受理)